

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功の



美術の時間
エロティックな
美的な要素

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その101 全国保育研究大会での「アートの日を楽しむ」

徳島のプログラムを体験

十月は、徳島市で第六十回全国保育研究大会が開かれ、全国各地から千四百人の保育士さんや保育の研究者が集まりました（十月十二日―十四日）。全体会が「アステイとくしま」で開かれた他、市内のホテルなどでさまざまな分科会が開かれました。そのなかの一つ、第八分科会（開催地企画分科会）午後の部では、県内の保育士さんと徳島県立近代美術館の連携活動が取り上げられました。タイトルは、「美術館との出会い―アートの日を楽しむ」。本館の亀井幸子企画交流室係長が講師として参加しました。

大会の案内には次のように書かれています。「徳島のいくつかの保育所では美術館の作品に触れて、子どもの自由な発想や感覚を認める活動を展開しています。自己表現をくりかえす中で子どもたちは認められる喜びと表現する楽しさを知り、自尊心を育てています。」

駅前阿波観光ホテルが会場となり、徳島市立保育所保育士会と亀井係長の実践報告の後、美術鑑賞の楽しさを体験してもらうワークショップを約百五十人の参加者で行いました。「心の色をうちあけて」という形のないものに色をプレゼントする制作と、自由な感想を認め合い交流する、保育所の見学で行っているプログラムです。県内の保育士さんたちは手分けして、活動の楽しさをリードする役割をはたしました。

参加規模がやや大きいため、美術館の展示室は分科会場にできませんでしたが、分科会後の追加企画として、美術館での活動を組み込んだものもできました。定員は二五名ほど。北海道や長崎、長野、愛知、福井、鳥取、大阪など、各地からやって来た先生が参加してくださいました。

閉館後の夜の展示室を使ったワークショップは、当館で子どもたちの見学や教員研修のときによく行う、「お気に入り」をさがそう、「ヤッピーネ」という感想を楽しく交流するプログラムです。本連載で何度か取り上げているので説明は繰り返しません。亀井係長、私、竹内利夫上席学芸員が進行役となり、グループに

分かれて体験しました。

先生方の熱い語り

この分科会は、徳島市の保育士さんたちが、地道な努力を重ねて準備をしてきたものです。とくにテーマが「美術館との出会い」ですので、何ヶ月も前から、保育所の仕事が終わった夕刻、美術館のアトリエに集まり、亀井係長を交えて話し合いを重ねてきました。先生方にはたいへんなご苦労があったことと思います。ですが、みなさん活き活きとして活躍されているように感じました。

印象的だったのは、分科会が終わる参加者の方々が美術館に移動してきたとき、先生方が私の姿を見かけて話しかけてくれたときのことです。「昼間の分科会に参加して、徳島のように保育所を受け入れている美術館は、全国どこを探してもない。絶対ないと思います」と言うのです。私は分科会に参加できませんでしたが、ぜひ伝えたいと思ってくださったのでしよう。

実際、交流タイムのとき、「はじめての体験だった」という声が多くありました。

「夜の美術館にはじめて参加でき新鮮でした」
「美術館では黙って見るものと思っていました。感想が交換でき、楽しくリラックスして見ることでできました」
「話をしながら見ることで、作品の見方が変わりました」
「美術館でゆったりとした気持ちになれたのは、はじめてです」
「自身が楽しかったことで、子どもたちにも伝えたい」
「自分の感想が評価され、大人でも嬉しくなりました」
などなど。

それ以上に感銘したのは、徳島の保育士さんたちが、美術館との連携について、ご自身の経験を全国から集まった先生方に熱く語ってくださいましたこと。T先生は、「『お気に入りを探そう』で作品を選ぶとき、大人はいろいろと考えて好きな作品がなかなか決まらないけど、子どもはさっと決める。作品だけでなく、子どもは大人のことを本当によく見ている。本質を見ている」と語り、子ども特有の鑑賞の仕方、認識の仕方を話してくれました。そして、「私は子ども

のことを尊敬しています」というしめくくりの言葉には、参加者をゆさぶる力強さがありました。

N先生の経験にもとづくお話は、参加者の想像を超えていたようです。徳島県立近代美術館では、「二歳児さんも楽しんで作品鑑賞をしている」という紹介が、「信じられない」という空気になりかけたときに話してくれたのです。

「私が、二歳児を見学につれてきた張本人です」と名乗り出て、「二歳児も一枚の絵を二十分くらい見えています」「最初は五歳児の鑑賞からスタートし、四歳児、三歳の終わり頃へと進んでいきました。何年か保育所で『アートの日』に取り組むなかで、二歳から五歳児まで鑑賞を楽しむ活動に広がったのだと思います」などと、二歳児の見学につながった経緯を、順を

追って説明してくれたのです。

保育所で幅広く制作や鑑賞に取り組む「アートの日」を積み上げることで、美術館での充実した鑑賞につながってきた地道な活動の紹介でした。しかし、「四、五歳児の見学では、二時間くらい普通に集中して見ている」という言葉には、やはり感嘆の声が聞こえました。普段話さない子ども、作品を通して話ができるのです。

H先生は、子どもの育ちについて話してくれました。他の子の話がよく聞けるようになり、子どもたちどうしの横の関係もすっかり育っているというお話です。確かに、展示室で自由に作品を見るとき、子どもたちは好きな絵の前に集まり、自分たちで感想を交流します。H先生は、そのような

経験が、人の話を聞こうとする子どもたちの態度を養い、普段の生活にも活かされていると言います。美術鑑賞は、子どもたちの成長にとつて、なくてはならない大切な時間であることを再確認させる話題でした。

それにしても先生方のお話は、子どもの鑑賞のあり方、活動が進展してきた流れ、子どもの育ち、というテーマを整理して述べたものとなり、全国から集まった先生方に大きな刺激を与えたように思いました。

深い鑑賞につながる

交流タイムのとき、「全国に経験を伝えてほしい」、「どのような見方も評価されるのがいい」という意見もありました。

学芸員の立場として私が補足したのは、自分の感覚を大切にして感想を出し合い、評価される経験を積んでいくと、もっと知りたくなり、深い鑑賞につながっていくことについてでした。五歳の子でも鑑賞を重ねると、子どもなりに色と形を分析して、自分の意見を述べる子がでてきます。「子どもの成長は奥深いですね」、ということもお話

しました。

ワークショップが終わり展示室から出ようとしていたとき、あるOBの先生から、「美術の目を開かせていただき、ありがとうございました」と深々とお礼をしていただきました。思いもしない言葉でびっくりしている、先生は、美術館と保育所の連携活動のなかで美術鑑賞が大好きになり、県外にも出かけて熱心に鑑賞をしているとのこと。感想を認め合うなかで美術が楽しくなり、もっと深く知りたくなっていく奥深さは、子どもも大人も違いはないのだと思いました。

それにしても、私の方こそ子どもたちが活き活きと活動する姿を見せていただき、鑑賞の可能性を実感させてもらった保育士の先生方にお礼を言わなければなりません。互いにお礼を言いたくなる活動となったのも、子どもと美術鑑賞の素晴らしさだと言えるのです。

近代美術館では、特別展「ベルギー近代美術の精華展」がはじまりました。十九世紀の印象派、二十世紀のマグリットやデルボーンな

ど、ベルギー美術の魅力をお楽しみください。

11月の催し

■特別展「日本・ベルギー友好150周年 ベルギー近代美術の精華展」

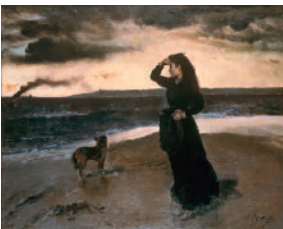
・ミュージアムコンサート「たのしいサックス」12日「土」13時〜13時45分 出演：たけと愉快な仲間たち サックスアンサンブル部 場所：文化の森シンボル広場ほか
・トークショー「もっと知りたい、ベルギー」12日「土」14時〜15時30分 講師：ベルナルド・カトリッセ（公益財団法人フランダースセンター館長）、須藤美昭子（ベルギー・フランダース政府観光局日本地区局長） 場所：1階多目的活動室
・手話通訳付き展示解説 13日「日」13時〜14時
・スペシャル・トーク（展示解説）20日「日」14時〜15時30分 講師：山田真規子「姫路市立美術館学芸係長」

・子ども鑑賞クラブ「ヨーロッパの巻」26日「土」14時〜14時45分
・学芸員による展示解説 27日「日」14時〜15時 講師：友井伸一（当館）
■所蔵作品展「特集 戦後日本画の人間表現」
■文化の森大秋祭り

3日「木・祝」
・日本画の絵具に挑戦！ 美術館で「ちよっと一息」コーナー 16時まで
・美術作品のみどころ紹介ミニ解説（各回15分）「吹田文明の版画」10時〜15時、「戦後日本画の人間表現」11時〜14時から



「ベルギー近代美術の精華展」チラシ



アルフレッド・ステヴァンス（オンフルールの浜辺の少女）1891年 姫路市立美術館